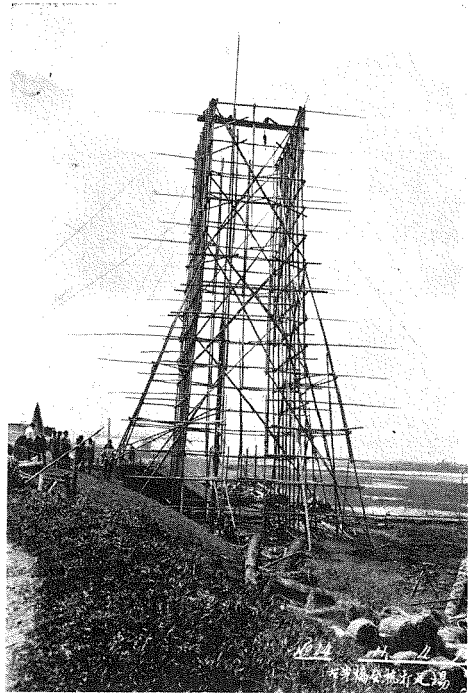


大師橋はこうして架設された

大師と羽田の間の此渡船は、躍進途上にある京濱工業地帯に於ける一異観とされて居た。そこで昭和8年暮に此の上流に架橋することに議決されたのである。

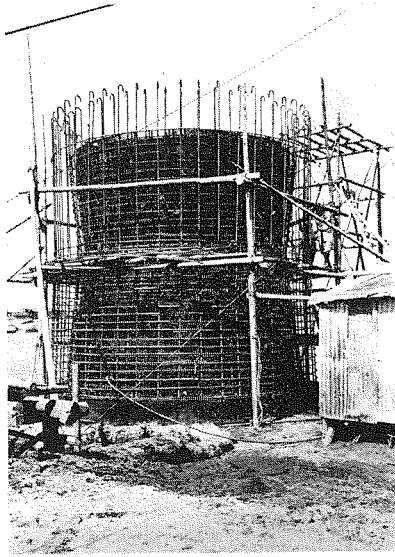
2. 工事着手

昭和11年3月神奈川県側から工事に着手するに至つた。



3. 架橋地点の遠望と渡船場



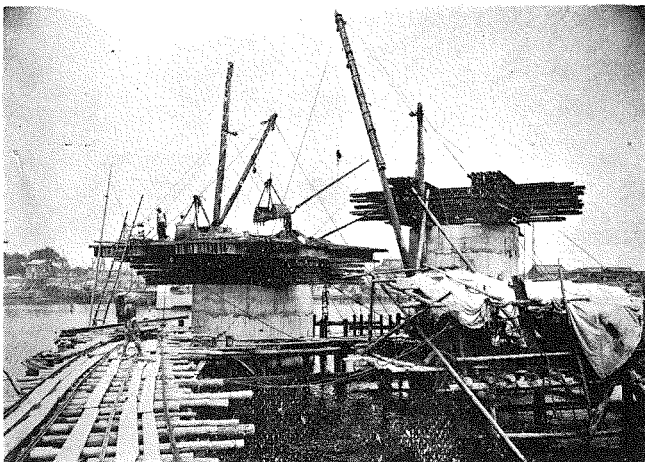


4. 橋脚基礎中井筒鉄筋組立状況

低水敷部分は吊塔付ゲルバー式鋼構三経間で、228.8mの長径間を架設することになり、外径6m壁厚60cmの鉄筋混凝土井筒2本を、中等潮位以下44mの砂利層迄沈下、此を基礎としてラーメン式鉄筋混凝土橋脚を造つた。

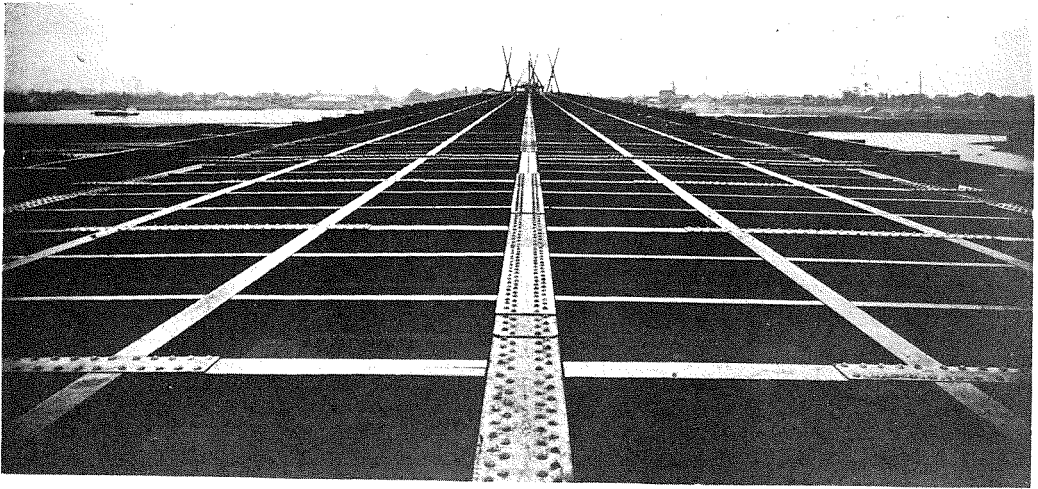
5. 橋脚杭打基礎及基礎 混凝土打

洪水敷部分の橋脚は、長9m～11m、末口24cmの基礎杭を用ひた。



6. 基礎井筒沈下状況

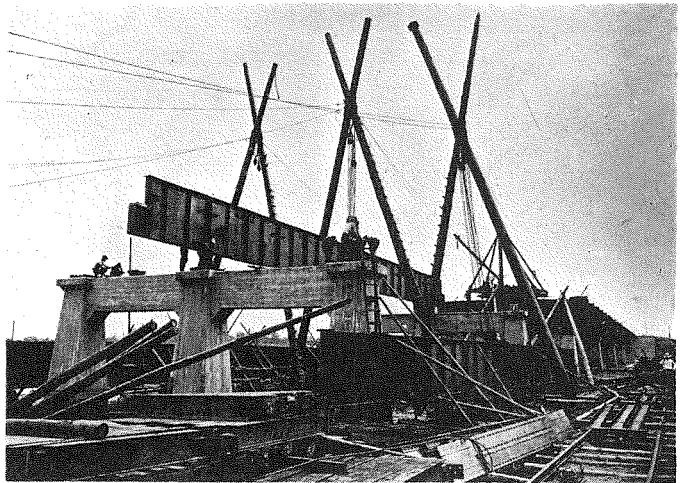
第3ロットに至り粘土層に突入してからは、湧水少く素堀で沈下して行つたが、39m沈下してから湧水甚しくなり、相当荷重をかけても沈下に困難を極めた。



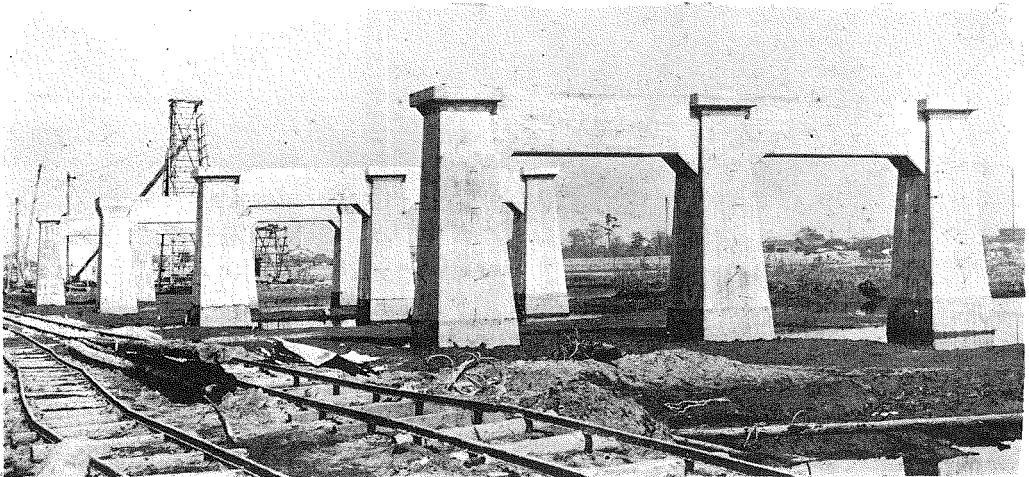
7. 架設完了せる鉄桁

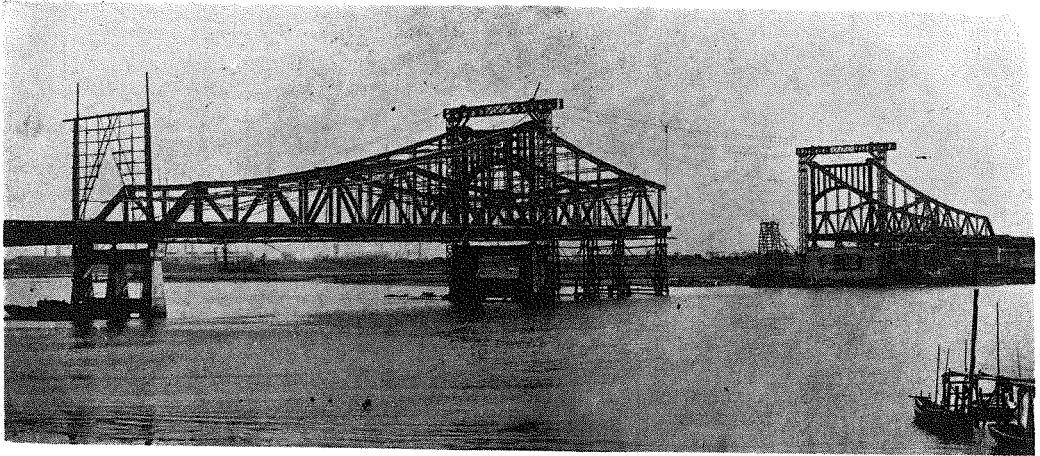
8. 鉄桁の架設

洪水敷部分なので、主桁は地上に於て組立て、鉸接後に依つて釣上げ架設した、主桁1本は約20噸である。



9. 完成せる橋脚





10. 鋼構架設状況

2 格點毎に足場を設けて死荷重を支持し、材料運搬はケーブルに依り、東京側碇着徑間より架設を始め、最後に懸垂徑間を施工した。

11. 竣工せる大師橋正面

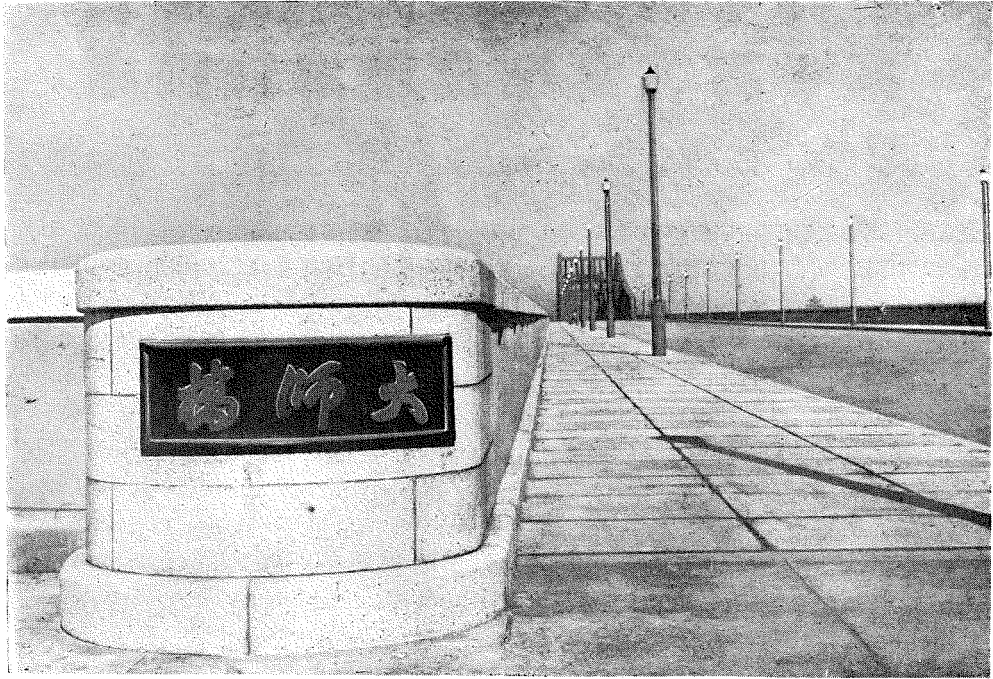




12. 竣工せる大師橋側面。

工事半にして支那事變の勃發に遭遇し、物價の昂騰勞力の不足、資材の規畫等幾多の困難を克服、昭和14年11月15日開通の式典を舉行するを得たのである。

使用せる	セメント	58,906袋
	鋼材	3,905噸
作業延人員	熟練工	68,800人
	不熟練工	41,500人



13. 大師橋高欄及燈柱（神奈川県側より東京方面を眺む）

セミスチール製高欄の計畫は時局に即應すべく設計を更改し
遂に鐵筋混凝土壁及花崗石構造とし、燈柱はコンクリート柱
を採用した。（以上）